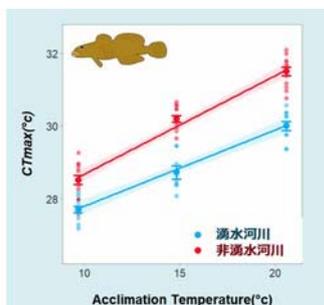


# 北海道自然史研究会 2020 年度大会

と き：2021年2月21日（日）13時半～17時半 研究発表・総会  
ところ：ウェブ開催（ZOOM使用）



II-8から; 風力発電の基で見つかった  
海ワシ類



ホームページ

<http://www.nh-hokkaido.jp/>

フェイスブックページ

<http://www.facebook.com/n.hokkaido>

## ◆問い合わせ先

北海道自然史研究会事務局 さっぽろ自然調査館内 n-h@cho.co.jp

〒004-0051 札幌市厚別区厚別中央1条7丁目1-45 山岸ビル3階 電話 011-892-5306 Fax 011-892-5318

## 大会プログラム

- 開催日時： 2021 年 2 月 21 日（土） 13 時半～17 時半
- 場所： <https://us02web.zoom.us/j/82623130402?pwd=bmFxMTZoa1pPeillyQWhxa1Jqa3dwZz09>
- 大会運営事務局：研究会事務局（さっぽろ自然調査館）、大原（北海道大学総合博物館）

- 
- 13:00～ 開場
  - 13:30～ 開会の挨拶、連絡事項
  - 13:40～16:30 研究・事例発表会
    - 堀 繁久 2020 年に北海道に飛来及び漂着したアカギカメムシ
    - 小玉愛子 外来種・クマノアシツメクサの赤花タイプの定点観察
    - 伊藤陽平 標高の異なるバイケイソウ集団における一斉開花特性の決定要因とその生態学的意義
    - 鈴木開士 冷水性魚類の局所的な種内変異：地下水流入がもたらす温度耐性の違い
    - 吉野智生 保護されたタンチョウヒナの人工育雛
    - 鈴木あすみ 鳥の標本をどう集めるか-冷凍庫調査はじめました-（仮）
    - 浅川満彦 酪農学園大学野生動物医学センター WAMC 刊死因解析等報告集における北海道の事例概観
    - 志賀健司 石狩市生振地区の“碁盤の目”の方位

- 
- 16:45～17:30 自然史研究会総会（2020 年度）

## 研究事例発表



13:40～15:00

2020 年に北海道に飛来及び漂着したアカギカメムシ

堀 繁久(北海道博物館)・野村昭英

外来種・クマノアシツメクサの赤花タイプの定点観察

小玉愛子(みちくさ研究所 in 苫小牧)

標高の異なるバイケイソウ集団における一斉開花特性の決定要因とその生態学的意義

伊藤陽平(北海道大学大学院・環境科学院)

冷水性魚類の局所的な種内変異: 地下水流入がもたらす温度耐性の違い

鈴木開士(北海道大学大学院・農)

15:10～16:30

吉野智生 保護されたタンチョウヒナの人工育雛

吉野智生(釧路市動物園)・松本文雄(釧路市動物園)

鳥の標本をどう集めるか ―冷凍庫調査はじめました―

鈴木あすみ(北海道博物館)

酪農学園大学野生動物医学センター WAMC 刊死因解析等報告集における北海道の事例概観

浅川満彦(酪農大)・吉野智生(釧路市動物園)

石狩市生振地区の“碁盤の目”の方位

志賀健司(いしかり砂丘の風資料館)

## 2020 年秋に北海道へ飛来及び漂着したアカギカメムシ

堀 繁久・野村昭英

2020 年の 8 月から 9 月にかけて、本来は亜熱帯～熱帯に生息するアカギカメムシが北海道で多数確認された。

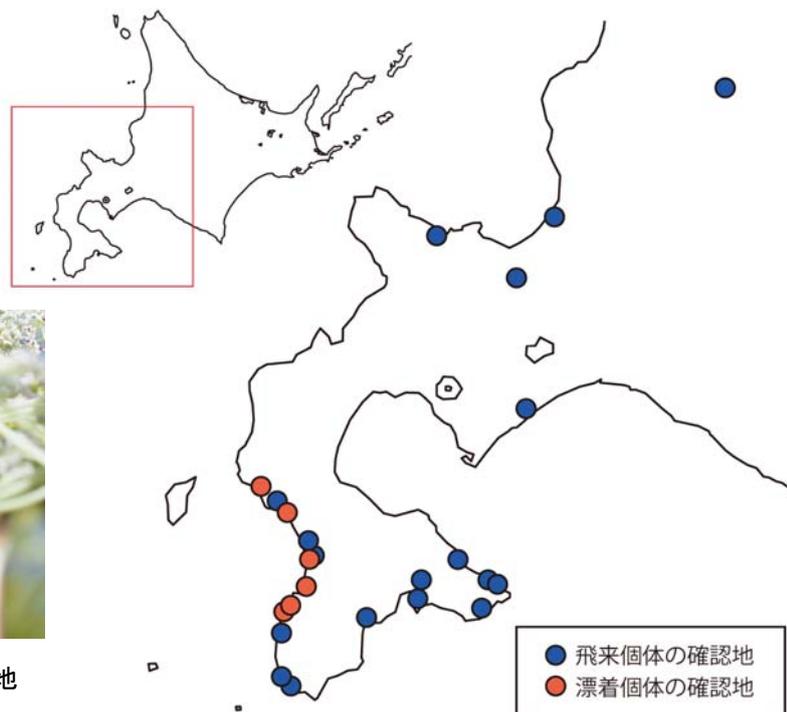
北海道で最初に本州が確認されたのは 2018 年の夏で、これまでに確認されたアカギカメムシは 241 個体である。それらのうち、207 個体 (85.9%) が日本海沿岸に打ち上がった漂着死体での確認で、34 個体 (14.1%) が北海道に飛来した個体と推測され、一個体を除き全て生きた状態で確認された。漂着個体の確認は松前町からせたな町にかけての渡島半島西海岸である。その地域はこれまで、ムネスジフトカミキリモドキやフタオビミドリトラカミキリなど暖流に乗って流木とともに流れ着いたと考えられる南方系昆虫の確認地と一致している。

飛来したアカギカメムシは渡島半島の海岸付近で広く確認されている。北は札幌市や旭川市でも確認され、北海道のかなり内陸部まで飛来したことが推察される。

アカギカメムシは交尾個体も確認され、繁殖能力を持ったまま飛来したと考えられるが、北海道の冬の気温は越冬困難であることと、本種の幼虫の宿主となるアカメガシワが分布していないため恒常的な定着には至らないと考える。しかし、複数の年にこれだけの個体数が侵入したことから、今後も年によっては本種が北海道に再び入ってくることは十分考えられる。



図 アカギカメムシの確認地



## 外来種・クマノアシツメクサの赤花タイプの定点観察

小玉愛子(みちくさ研究所 in 苫小牧)

2016年苫小牧市内の住宅地で、ヨーロッパ原産のマメ科の外来種、クマノアシツメクサ(*Anthyllis vulneraria* L.)の赤花タイプを確認した。確認場所は国道から東側に直進する二車線の市道で、中央分離帯の東西約400mにわたり個体が分布していた。クマノアシツメクサの赤花タイプの確認例は苫小牧では初記録となり、今後の分布拡大または縮小の経緯を確認することから5年間定点観察を行った。

初確認後、7月下旬には道路管理のため全ての個体の地上部が刈り払われていたが、翌年も同じ地区で当該個体を確認することができ、一般的なクマノアシツメクサに比べて草丈が低いなどの特性から草刈りが行われた後も地上部が残っている様子から、草刈の影響を受けにくい可能性が高いと考えられた。

2020年時点において、苫小牧市内において他の地区では確認することができず、極端な分布拡大は確認できなかったが、中央分離帯両側の歩道の緑地や道路間隙に分布域を拡大している様子が継続して確認され、特に公園周辺やバス停などの、人の動きが激しく、草刈りが丁寧に行われている空地で顕著に群生していたことから、今後、靴や車などに種子が付着して分布域を拡大する可能性が高いと考えられた。刈り込みが行われた後も地上部が残っていることから、一度定着すると駆除が難しく、今後、他の地域でも分布が拡大していく恐れがあると考えている。

また、同種が「アカバナゲンゲ」の商品名で販売されていた、という情報を入手し、今後、ガーデニングからの逸出で同種の分布が広がる可能性も高く、今後の情報に注意をしたい。



写真1 群生するクマノアシツメクサの赤花タイプ



写真2 道路間隙で生育する様子

## 標高の異なるバイケイソウ集団における一斉開花特性の決定要因と その生態学的意義

伊藤陽平 (北海道大学大学院環境科学院)

一斉開花結実現象(以下一斉開花)は、数年～数十年に一度のタイムスパンで、個体群で同調して花や種子が大量生産される現象である。一斉開花についての究極要因(植食者の食害回避や受粉効率など)や至近要因(資源収支や気象トリガー)に関する多数の研究例があるが、これらの要因が一斉開花の構成要素(個体間の同調性・個体群の周期性)にどのように作用するかについては不明点が多い。

バイケイソウ *Veratrum album* (シュロソウ科) 個体群は、数年に一度の周期で一斉開花が起こることが知られている。本種は北海道の幅広い標高に分布しており、低地と高山では異なる開花パターンが観察されている。低地と高山では環境が大きく異なるため、一斉開花に作用する究極要因や至近要因も異なっていることが予想される。本研究は、標高間で異なるバイケイソウの一斉開花の同調性・周期性の決定要因および生態学的意義を解明することを目的としており、「同調性と食害・受粉に作用する選択圧の関係」、「周期性と資源収支の関係」に着目した。

野外調査は 2019～2020 年に北海道内の 12 個体群(低地 6 個体群、高山 6 個体群)を対象に行なった。各個体群の同調性の程度を定量化するために、開花個体密度と割合を記録した。各個体群における花茎・種子食害強度や結果率を調べ、開花個体密度と繁殖成功との関係性について解析した。また、繁殖への資源投資量を比較するために開花個体サイズと花数を測定し、根茎の成長痕から各個体群の開花周期を推定した。さらに、生育期間の日射量と光合成特性の計測を行い、低地と高山における年間 CO<sub>2</sub> 固定量を推定した。

高山個体群は低地個体群よりも開花同調性が低い傾向にあった。低地個体群では開花個体密度が高いほど食害回避を介して繁殖成功度が上昇したが、高山ではそのような傾向は見られなかった。一方で、受粉効率と開花同調性の関連性はいずれの個体群でも見られなかった。高山個体群では、開花同調性に作用する選択圧が弱いと考えられた。高山個体群は低地個体群よりも開花周期が短かく、開花個体サイズや花数が小さかった。一方で、シーズンあたりの CO<sub>2</sub> 固定量は低地個体群よりも 1.3 倍高かった。従って、高山では低地よりも繁殖コストは低いが、年獲得資源量が多いために、開花周期が短くなっていると考えられた。

以上から、バイケイソウの低地個体群と高山個体群では一斉開花現象に作用する究極要因や至近要因が異なり、その結果一斉開花の構成要素である同調性と周期性の変異が生じた結論づけた。

## 冷水性魚類の局所的な種内変異: 地下水流入がもたらす温度耐性の違い

鈴木開士 (北海道大学大学院・農)

### 【背景】

温暖化の進行は冷水性種にとって大きな危機である。既に温度上昇に対する様々な応答が報告されているが、応答の仕方は種内であっても一様ではない(種内変異)。これまで温度耐性の種内変異は、The Climate Extremes Hypothesis や The Climate Variability Hypothesis といった仮説に基づき、緯度や気候帯のような広域スケールで議論されてきた。その一方で、景観スケールにおいてはその情報が不足しており、この情報不足は温暖化影響予測や保全管理に影響を与える可能性がある。

淡水域においては河川へ地下水が多量流入することで、景観スケールで水温環境に違いが生まれている。この湧水河川では、夏季水温と、年間を通じての変動性が非湧水河川よりも低い。その結果、そこに生息する生物の温度耐性とその可塑性も低くなっている可能性がある。そこで本研究の目的を「湧水 非湧水河川における冷水性魚類の温度耐性の違いを明らかにすること」とした。

### 【方法】

石狩川水系空知川支流にて採捕したハナカジカ(*Cottus Nozawae*)を用いて、室内実験により 10、15、20 に馴化させた時の限界水温( $CT_{max}$ )を求めた。ロガーにより各河川の水温を記録し、最暖月平均水温、瞬間最大水温、年間の変動係数、年間の水温変動幅(最大 最小)を算出した。

説明変数を馴化水温、河川タイプ、それらの交互作用項、体重とする GLMM を用いて  $CT_{max}$  を推定した。AIC を基準にしたモデル選択によりベストモデルを決定した。

### 【結果】

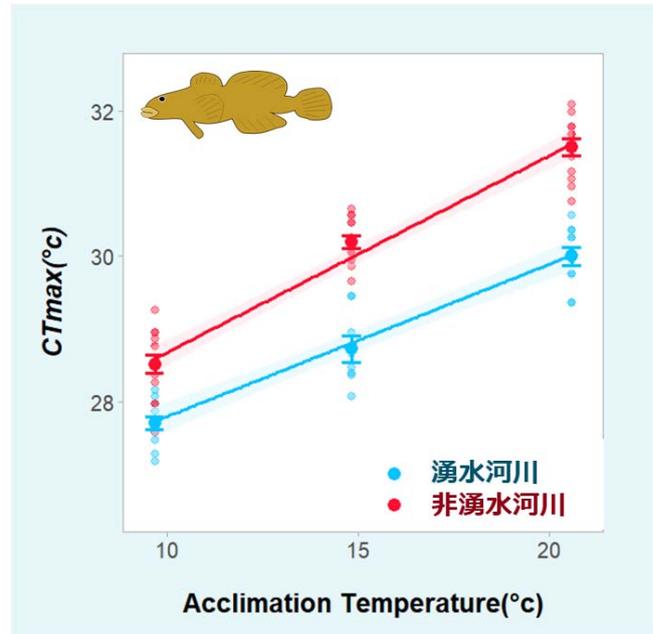
最暖月月平均水温、瞬間最大水温、年間の変動係数、年間の水温変動幅は全て非湧水河川よりも湧水河川において小さくなっていた。ベストモデルには、馴化水温、河川タイプ、その交互作用が採用され、湧水河川において  $CT_{max}$  とその可塑性が低くなっていることが分かった(下図)。

### 【考察】

ハナカジカの  $CT_{max}$  は生息地の最大水温の増加とともに大きくなっており、これは The Climate Extremes Hypothesis と矛盾がない。また、 $CT_{max}$  の可塑性は、明瞭な相関関係ではないものの、生息地の年間の水温変動係数、年間の水温変動幅が小さい湧水河川で小さくなっていたことから The Climate Variability Hypothesis と矛盾がない。これまで温度耐性の種内変異は基本的に緯度や気候帯のような広域スケールで多く確認されてきたため、本研究は景観スケール(最小 10 km 以下)においてもその存在を明らかにした数少ない研究事例となった。本研究で認められた種内変異が先天的

な要因と後天的な要因のどちらに依存しているか明らかにすることは、移植や連結性の回復等の保全管理を適切に行うために必要であるため、今後更なる研究が望まれる。

図 10℃、15℃、20℃馴化時のハナカジカ CTmax。青色は湧水河川、赤色は非湧水河川を表す。点は観測値を、エラーバーとその中心の点は標準誤差と平均値を表す。直線と塗られた領域はそれぞれ GLMM による推定値とその 95%信頼区間を表す。



## 保護されたタンチョウヒナの人工育雛

吉野智生・松本文雄（釧路市動物園）

釧路市動物園は希少種であるタンチョウ *Grus japonensis* の保護に取り組んでおり、環境省の保護増殖事業に基づいて飼育下繁殖、冬季給餌、保護収容などを行っている。繁殖は自然繁殖・育雛を基本としており、受精の有無を確認するため一時的に卵をふ卵器に収容するが、孵化予定日の約 1 週間前には親元に戻している。過去には保護増殖のため直接または間接的に人工孵卵・育雛を行っていたが、現在は卵やヒナが野生から保護されてきた場合、かつ預け先になるつがいがない場合にのみ行うことにしている。2020 年 6 月 10 日に、釧路市内の公共施設敷地内にて生後約 1 か月齢のタンチョウのヒナが保護され、人工育雛を行ったため報告する。なお、このヒナの親鳥は収容後一週間以上発見されず、のちに発見されたものの合流が困難であったことから人工育雛に移行した。

収容後約 1 週間は動物園で飼育し、6 月 18 日に阿寒国際ツルセンターに移送した。飼育場は室内（約 2m 四方）と屋外（約 4×7m）の両方を使用し、夜間は室内に収容した。室内は人工芝とフリースを敷き、コルツヒーターを設置して室温を約 25-28 度に保った。フリースは糞で汚れるので一日 1~2 回交換した。日中はドアを開放して出入り自由とし、餌はペレット、ホッケ切り身および野外から採集してきた小魚（ヤチウグイ、トミヨ、ヤマメなど）およびザリガニ、葉物（小松菜、白菜等）を 1 日 7~8 回に分けて与えた。小魚やザリガニは自分から食べたが、切り身やペレットは当初自分からは食べなかったためハシでつまんで差し出し、食べさせたが、しばらくすると自分でも食べるようになった。足曲がりなど異常防止のため、エサの量は一日の体重増加率が 20%以下になるように調節し、日中は屋外ケージに出し、人が追ったり立たせたりして運動をさせた。

発育は順調に進み、体重は飼育開始後約 1 か月で 3kg、2 か月後には 5kg に到達した。6 月 29 日から、日中は屋外の広い運動場（約 20m 四方）に出して運動させた。8 月半ばには羽ばたきながら運動場を走り回る行動が見られるようになった。8 月 20 日頃から羽ばたいて運動場フェンスより高く飛ぶのが確認できたため、8 月 23 日から天上ネットのあるケージに移し、通常通りの飼育、給餌方法に移行した。ケージ移行後はペレット主体に切り替え、魚を徐々に減らした。

現在、体重は 7kg を越え、体格も成鳥とほぼ同じにまで成長している。今後、飼育下繁殖に向けてペアリング等を進めていく予定である。

## 鳥の標本をどう集めるか – 冷凍庫調査はじめました –

鈴木あすみ(北海道博物館)

環境教育や自然史研究の場面において、博物館等の所蔵する自然史標本が重要な役割を果たすことは少なくない。鳥類や哺乳類の標本については、鳥獣保護管理法による捕獲の制限に加え、博物館に配当される予算の減少や剥製業者の廃業などによって、良質な標本の収集機会が減少している。環境教育施設や博物館において鳥類標本を入手する主な手段は、ロードキルや衝突によって死亡した個体の拾得である。鳥類は遺体拾得の機会が限られるため、博物館等で入手できた場合には冷凍庫において一時保管することが多い。保管期間は標本化までの間となるが、長期の冷凍保管は遺体のコンディションを悪化させるため、この期間は短いほうがよい。現状では、冷凍鳥類遺体は各機関内で管理および活用されている。ところが、量的な課題や担当者による個体選別の結果として早期の標本化がかなわないことがあり、この状況は不要な長期保存によるコンディションの悪化を本意ながら招いてしまっている。

本研究は、鳥類標本を材料とし、遺体拾得から標本作製の過程を経てそれらが収蔵資料や展示物となるまでの一連の流れについて、複数の機関が協力できる体制を構築することを目的として行った。この体制を作るにあたって第一に必要とされるのは、現在各機関が保有する冷凍鳥類遺体の可視化であり、データベース作成を実施したので報告する。

現状では冷凍鳥類遺体等の未登録標本の保有状況を館外に公開していることは稀だが、仮に標本化の優先度が異なる利用者が本情報にアクセス可能になると、活用チャンネルの増加が見込まれる。例えば、当館では所蔵する鳥類標本の数は300点ほどで本剥製や骨格標本を含む。タンチョウや大型のワシタカ類、コウライキジやニワトリは複数点数の標本を有するが、残念ながらハシブトガラやスズメなどに代表されるような普通種の標本は十分に揃っていない状態であったりする。

2020年度は冷凍鳥類遺体の点数調査およびデータベースの作成を行った。調査対象は道央地域の博物館・野生動物保護施設計4箇所で冷凍保管されている野生由来の鳥類遺体とした。調査では、冷凍遺体につけられたラベルや管理データより、採集年月日や採集場所の情報を得るとともに、図鑑を用いた種同定を行った。今回調査を実施できた機関は4施設と少ないが、それぞれ分類群の構成には違いが見られるなどの結果が得られた。

本データベースの公開によって利用チャンネルの増加にはつながることが期待されるが、量的な課題の解決のためには標本化スピードの向上について改善の必要があり、これについては今後いくつかの取り組みを実施予定である。本研究に含まれるこれらの取り組みを、博物館同士が協力し、情報交換機能をもたせた収集体制を構築することの端緒としたい。

今後も現場に基づいて体制の構築を進めていきたいと考えているので、意見やアイデアをお寄せください。調査協力者や共同研究者も募集中です。また本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けて実施しました。

## 酪農学園大学野生動物医学センター WAMC 刊死因解析等 報告集における北海道の事例概観

浅川満彦(酪農大)・吉野智生(釧路市動物園)

2004 年 4 月、酪農学園大学野生動物医学センター(以下、WAMC)は文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(酪農学園大学大学院、当時代表: 谷山弘行 元教授、現・酪農学園理事長)の一環として、大学附属動物病院(現・動物医療センター)構内に設立された。WAMC は外来種を含む野生動物のみならず、動物園水族館の飼育動物、アルパカやダチョウなどの特用家畜・家禽、愛玩鳥、エキゾチック動物等を対象に寄生虫病を含む感染症の病原体診断・疫学の研究活動を展開してきた。

しかし、WAMC の活動が活発化するにつれ、動物病院構内に設置されたこともあり、傷病個体が持ち込まれはじめ、次第に、野外で見つかる野生動物の死体も搬入された。当時、WAMC が博物館学内実習(学芸員課程)の拠点であったので、標本処理や仮剥製などの教材として集めており、歓迎であった。

ところが、大量死や不審死などで発生した死体の死因解明して欲しいという依頼も増えた。死因解明の本来業務は獣医病理学が担っている。ところが、野外で見つかる死体の多くは、腐敗・変性が著しく、時には体のごく一部しか無い場合もあった。そうなると、病理解剖の対象外として門前払いされることが多いようで、最後に WAMC に訪れるということが続いた。

それならば判る部分だけでも記録しようとなったが、その過程で、著しく変性した動物の死体からであっても、法医学のようなアプローチで、何らかの情報を引き出す科学的基盤が必要と切実に感じ、可能な限り関連雑誌に投稿をしてきた。これまでに掲載された本冊子は 38 篇となった。今回、そのような科学が日本で花開く契機の基盤の一部となるように、1 冊に編まれた: 浅川満彦・吉野智生. 2021. 酪農学園大学野生動物医学センター WAMC に依頼された死因解析等法獣医学に関わる報告集. 酪農学園大学社会連携センター, 北海道江別市: 178 pp.

(ISBN978-4-902786-29-3 C3047)。

収載される報告を、便宜上、次のような 5 つのカテゴリーに分けた ; I 概要紹介、II 野鳥(スズメ目)と III(スズメ目以外)の剖検記録、IV 流通過程や家屋内での発見事例、V 体の一部あるいは体毛の鑑定事例。今回は、この冊子の中で、本研究会で扱ったものを除いた北海道における事例を紹介し、自然史との関連性を論考した。

## 石狩市生振地区の“碁盤の目”の方位

志賀健司(いしかり砂丘の風資料館)

世界各地の都市にはグリッド状の道路網(いわゆる“碁盤の目”)を持つ区画が多数存在する。日本国内でも古くは平城京や平安京として形成された奈良,京都を筆頭に各地に見られるが,北海道内では札幌,旭川,帯広などの主要都市に限らず,小さな街や農村地区までもグリッド状に区画されている。これは 1890(明治 23)年施行の植民地区画制度により設定されたものである(安達ほか 2015)。

これらグリッド区画は通常, 条 丁目, 線 号などと直交座標系で表現されており,その軸の設定の基準は,東西南北の方位,海岸線や河川・起伏などの地形,ランドマーク的な山が見える方向(山当て)の 3 パターンに分類される。例えば札幌や帯広などは概ね東西南北の方位型のようなところがある。

ところが,京都や奈良のグリッドは正確に地理的な南北(=北極点・南極点の方向=真北・真南)を向いているのに対して,北海道内では,南北に設定されているように見えるグリッドのほとんどは,真北・真南方向に対して角度にして数度~10 度程度の傾きがある。その中でも特に 6~7 度,西偏しているグリッド区画が多い。その要因は,開拓期の区画設定の測定の基準として,簡易的に当時の磁北が使用されたためと考えられる(畑山 2011)。

石狩市生振に見られるグリッド区画は,直交座標としての原点(基線・一号)は生振地区の西端に設定され,東は新篠津村~月形町の石狩川西岸(四十八線),北は月形町南耕地(北十九号),南は江別市美原(南十四号)まで及ぶ,広大な“碁盤の目”である。座標系の南北軸は真北から約 6 度,西偏している。その角度は明治時代中期の北海道の磁北の方向とほぼ一致しており,地形やランドマーク的条件を検討したところ基準とするには弱いことから,生振グリッドは磁北を基準としたものと考えられる。

この結果は,自分の住む街の道路の向きは地形や地磁気といった地球・宇宙の活動と関係があることを気づかせる材料であり,小中学生が地域の自然と歴史を学ぶ際の良い教材となる可能性も示している。

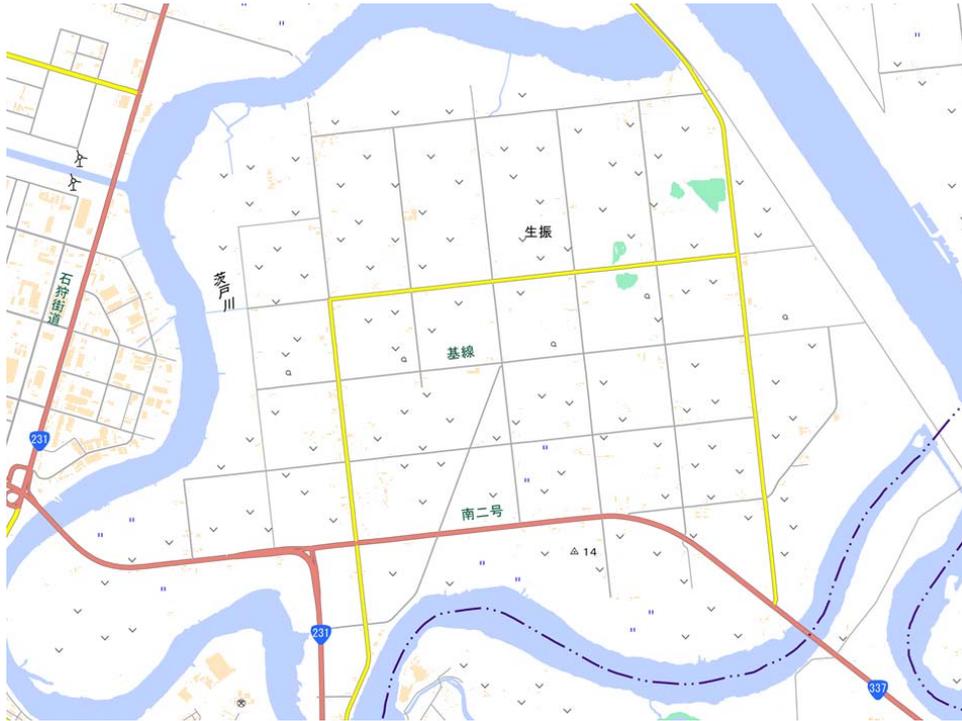


図1. 石狩市生振地区の“碁盤の目” (地理院地図) .



図2. 生振地区の南北方向の道路と磁北の微妙なズレ.

北海道自然史研究会の歴史

日時	行事	開催地	講演・シンポジウム	発表	担当	事務局	会長
1993年02月	設立集会	札幌・雪印会館	伊藤浩司「サハリンと北海道-植生からみた特異性と共通性-」				
1993年09月	野外研修会	上川町 層雲峡	巡検 (保田信紀)		保田		
1994年01月	第1回研究会	札幌・開拓記念館	福岡イト子「アイヌ民族と植物」	10			
1994年10月	第2回研究会	沼田町	古澤 仁「沼田町海獣化石」	8	古沢		
1995年10月	第3回研究会	様似町	大原昌宏「中部千島の自然」 矢野牧夫「自然史と文化史の接点から」	6	芥川		
1996年05月	第4回研究会	黒松内町	矢野牧夫「フナはいつ黒松内にやってきたか」 大原昌宏「渡島半島の昆虫」	7	高橋		
1997年05月	第5回研究会	美幌町	シンポジウム「野生生物との共存を考える」 小林聡史/中川元/宇野裕之	6	鬼丸		
1998年05月	第6回研究会	倶知安町	シンポジウム「羊蹄山の自然史」 藤田郁男/五十嵐博/保田信紀	3	岡崎		
1999年10月	第7回研究会	標津・サーモンパーク	シンポジウム「自然と遊ぶ」 岡崎克則/鬼丸和幸	-	小宮山		
2000年04月	第8回研究会	旭川・旭川市博物館	大原 雅「春植物の繁殖戦略」 小野有五「嵐山のカタクリについて」 シンポジウム「春植物と里山の自然」 出羽 寛/大原昌宏/鬼丸和幸	-	齋藤		
2001年08月	第9回研究会	平取・二風谷博物館	萱野志朗「アイヌ語からアイヌ民族の暮らしを考える」 五十嵐博「植物人と人の関わり～帰化植物を例に」	1	鬼丸	美幌	
2004年03月	臨時集会・総会	札幌・博物館センター	「自然史研究会の今後の体制について」 齋藤和範「淡水生態系を脅かす国内最大級の外来底生生物」	3	調査館		
2004年12月	2004年度研究会	札幌・北大総合博物館	「自然史研究会の今後 - 研究会・ポータルサイト・絵本出版」	3	調査館		
2005年10月	2005年度研究会	札幌・北大総合博物館	シンポジウム「博物館と分類学-市民と社会の分類学への二- ズ-」久保田正秀/丹羽真一/大原昌宏	4	大原		
2006年07月	2006年度研究会	遠軽・丸瀬布昆虫生態館	五十嵐博「網走地方などに分布の偏る植物たち」	3	喜田		
2007年09月	2007年度研究会	登別・ヒグマ博物館	「登別市ネイチャーセンターの活動紹介」	4	前田		
2010年02月	2009年度研究会	札幌・博物館センター	保田信紀「大雪山の高山昆虫」	10	山崎/持田		
2011年03月	2010年度研究会	札幌・道庁赤レンガ庁舎	川辺百樹「大雪山系の自然」	11	大原/山崎		
2012年05月	2011年度研究会	石狩・石狩市民図書館	石狩海辺学 (ウメオロジー) を学ぶ	13	志賀/内藤		
2013年02月	2012年度研究会	札幌・北大総合博物館	NPO法人西日本自然史系博物館ネットワークの活動について /「プラスチック標本作製講座」	10	大原		
2014年02月	2013年度研究会	札幌・博物館センター	シンポジウム「地域博物館とネットワーク ~新・札幌博物館に求められるもの~/」 「プラスチック・包埋封入標本作製」	14	山崎		
2015年02月	2014年度研究会	帯広・帯広百年記念館	事例報告: 十勝の自然史研究	12	持田		
2016年02月	2015年度研究会	札幌・北海道博物館	会員発表/サイエンスミュージアムネット (S-net) 事業における 標本データベースへのデータ提供方法と活用に関する説明会	11	水島		
2017年02月	2016年度研究会	札幌・北大総合博物館	会員発表	13	大原		
2018年02月	2017年度研究会	小樽・小樽市総合博物館	会員発表	14	山本/大鐘		
2019年02月	2018年度研究会	札幌・北大総合博物館	会員発表	11	大原		
2020年02月	2019年度研究会	旭川・教育大旭川校	会員発表	12	今村		
2021年02月	2020年度研究会	ウェブ開催	会員発表	8	大原		



1994 年度総会 (沼田町)



2001 年度巡検 (平取町)